

講評・指定討論: 会話データ分析研究の 社会的貢献とその方法

三牧陽子
大阪大学
国際教育交流センター

進行

- 1 研究と社会的貢献 マクロに考える
- 2 講評
 - ・趣旨について
 - ・議論の枠組みについて
 - ・話題提供の各分析について
- 3 全体討論に向けて

1 研究と社会的貢献:マクロに考える

研究一般

研究にあたり、社会的貢献を意識すること

→ あらゆる分野の研究にとって当然の
「普遍的な課題」

研究費を用いて実施

→ 説明責任(当然の義務)

➡ いくつかの観点から考える

研究タイプ 総務省統計局「科学技術研究調査」

〈用語の解説「性格別研究」

自然科学(理学, 工学, 農学及び保健)に使用した研究費の区分)

- ① **基礎研究**: 理論的又は実験的研究
 - ・仮説や理論を形成するため
 - ・新しい知識を得るため
- ② **応用研究**
 - ・実用化の可能性を確かめる研究
 - ・新たな応用方法を探索する研究
- ③ **開発研究**: ①や②を利用
 - ・新しい材料, 装置, 製品, システム, 工程
 - ・既存のものの改良をねらいとする研究

研究タイプ 総務省統計局「科学技術研究調査」

- ① **基礎研究**: 理論的又は実験的、長期的視野に立った基礎研究の推進重視
 ・ 仮説や理論を形成するため (国の重要課題)
 ・ 新しい知識を得るため **成果が見えにくい?**
- ② **応用研究**
 ・ 実用化の可能性を確かめる研究
 ・ 新たな応用方法を探索する研究 **社会への貢献に結びつきやすい**
- ③ **開発研究**: ①や②を利用
 ・ 新しい材料, 装置, 製品, システム, 工程
 ・ 既存のものの改良をねらいとする研究

研究領域:

それぞれに「基礎研究」「応用研究」「開発研究」

□ **自然科学系**: 新技術の応用、新製品の開発普及

□ **生命科学系**: 新規治療法や検査法、新薬の開発

研究成果・社会への還元
 が一般にも見えやすい



□ **社会科学系・人文科学系**

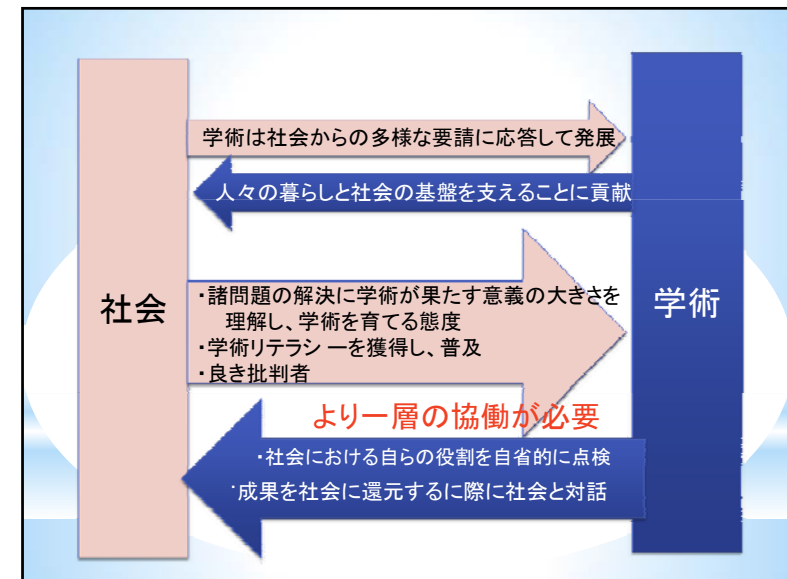
では、どのような形が
 可能か?

上記領域ほど、
 直接的ではない

日本学術会議(2010)
 「日本の展望—学術からの提言 2010」

＜社会と学術の関わりとつなぎ方＞

- ① **「学術のための学術」**
 社会的に承認されている価値や目的から独立に
 自然や社会現象などの「あるもの」について認識
 し、理解を深める **長期スパン
 「社会のための学術」の
 基盤を作り出す**
- ② **「社会のための学術」**
 目的: 人間社会における利益の促進、問題解決
 のための実用
 制度や技術の開発



社会科学系・人文科学系 社会言語科学の場合

社会言語科学会：

発足当初から

「ウェルフェア・リングイスティクス」

を理念として示す

= 社会への貢献を志向

本ワークショップの問いかけ

会話分析研究の場合は？

2 講評

- (1) 趣旨について
- (2) 議論の枠組みについて
- (3) 話題提供の各分析について

講評(1) ワークショップの趣旨について

趣旨・主張

会話データ分析研究の社会的貢献の可能性を問う

会話データ分析研究の意義と可能性：

「社会の実態をあぶり出し、問い直し、改善していく」
(中井)

普段、何気なく行っている会話を、詳細に分析することによって、初めて見えてくるものは多く、また、大きい
(配慮、パワー、ジェンダー、アイデンティティ等)

講評(2) 議論の枠組みについて

次のマトリックス(中井より)

社会貢献志向

実践重視

	①研究から スタートするもの	②実践研究から スタートするもの
A.会話 データ分析	・会話データの 分析から実態を探る 研究	・実践現場の会話データ の分析から 実態を探る実践研究
B.実践への活用・ 改善	・個々の実践現場へ の活用	・個々の実践現場の改善
C.社会的貢献	・様々な実践現場への貢献	

理論について

- ・どこに位置づけられるのか？ Aの前？
- ・理論構築を主目的とした会話データ分析研究の社会貢献の可能性は？
 基礎研究・基盤研究の位置づけ
 「長期的スパンで見れば、『社会のための学術』の基盤を作り出す」(学術会議2010)

本ワークショップの枠組み

(個々の実践現場→様々な実践現場への貢献)

- ・比較的実用的、わかりやすい貢献を前面に
- ・それとともに、**会話データ分析によって見いだされる新たな知見の理論化**とその普及にも注目すべきではないか

講評(3) 話題提供の各分析について

話題提供① 接触場面の研究(加藤)

A:ミクロの接触場面の談話研究

管理プロセス研究

ABC相互は
循環的な関係

B:教育実践での応用

実際に接触場面管理プロセスを体験させ、意識化と共有化

C:マクロレベルへの応用

共生の規範と管理を広い視野から捉える

「研究のための研究」(A段階)で終わらず、B、Cへの発展が可能になる、という好例

話題提供② メディアの分析(大場)

A:メディアの談話を分析

説得力のある会話データ

B:教育実践

授業でAを素材に、メディアリテラシー教育
 学生自身による会話データ分析活動

C:学会等で発表し、社会に公開・議論

他の教育現場や実践者と問題を共有
 異なる教育現場への還元の可能性

C:学会等での研究成果の公開は、その学問領域全体の知見を豊かにし、新たな発展の契機にもなる

話題提供③ 教室談話の分析(寅丸)

A:教室談話を分析

目的:自らが関与する教室活動を深く理解

B:教育現場へ還元

Aによって、授業改善、教師の成長

C:他の実践現場に開示

得られた知見を広く公開、普及

A←→B間だけでなく、Cで他の実践現場にも影響

3 全体討論に向けて

◆ 研究成果の社会への貢献

- ・大げさに考える必要はない
学会発表、論文発表も立派な貢献
- ・研究の種類やテーマによって、貢献の形は多様
- ・話題提供の例はヒントが満載
- ・自分の研究の場合は？

◆ 会話データ分析研究

会話は、すべての人が日々従事している営み。
分析することによって、身近であるのに気づいていない様々な知見を一般にも知らせ、コミュニケーション問題の改善に役立つ可能性を秘めている

◆ 「アウトリーチ活動」

(研究成果公開活動:

研究成果を一般市民を対象にわかりやすく伝えたり
双方向的にコミュニケーションを図ったりする活動)

大阪大学アウトリーチWEBより
http://outreach.21c-kaitokudo.osaka-u.ac.jp/outreach_info/outreach_info_action/

◎ タイプA 学外の方に直接発信

- ・公開講座
- ・シンポジウム
- ・サイエンスカフェ
- ・研究施設公開
- ・小中高生向け授業
- ・科学イベントへ出展

◎ タイプB メディアを通じて発信

- ・展示
- ・WEB
- ・プレスリリース
- ・一般向け書籍
- ・TV/ラジオ/ネット番組
- ・映像コンテンツ

* 最後に

各自にふさわしい形で
研究と社会的貢献を考え、
実践しよう

参考文献

文部科学省(2007).平成19年版科学技術白書
内閣府(2006).H18年度科学技術振興調整費「効果的な理解
増進事業の実施のための手法開発に関する調査」成果報告
日本学術会議(2010) 勧告「総合的な科学・技術政策の確立に
よる科学・技術研究の持続的振興に向けて」
日本学術会議(2010)「日本の展望—学術からの提言 2010」
<http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-21-tsoukai.pdf>
大阪大学アウトリーチWEB:研究者向けアウトリーチ活動支援
情報 [http://outreach.21c-kaitokudo.osaka-u.ac.jp/
outreach_info/outreach_info_action/](http://outreach.21c-kaitokudo.osaka-u.ac.jp/outreach_info/outreach_info_action/)
総合科学技術会議基本政策専門調査会(2010)。「基礎研究
強化に向けて講ずべき長期的方策について」
総務省統計局「平成23年科学技術研究調査」(2011)
http://www.stat.go.jp/data/kagaku/2011/a3_23you.htm